「イスラエル建国史」

39　独立闘争 5

『つのぶえ』紙に掲載された「イスラエル建国史」の過去記事は、ハーベストタイムのウェブサイト（http://www.harvesttime.tv/news-topics/history-of-israel/）で公開しています。

【これまでの流れ】

第二次世界大戦後、ヨーロッパでは数十万というユダヤ人難民が路頭に迷い、パレスチナへの移住を求めていた。しかし、移住を制限する英政府とユダヤ社会の間では、日に日に対立が深まっていった。その解決のため、英米によりパレスチナをユダヤ自治州とアラブ自治州に分ける「モリソン・グラディプラン」が提案されたが、アラブ側も、ユダヤ当局もその受け入れを拒否した。そのため、英政府は問題解決の場を国連に求めることになる。ユダヤ社会は、ユダヤ人国家の建設を求めることで一致していた。その案に意外にも賛意を示したのがソ連のグロムイコ大使であった。

ソ連の態度

西側の大国イギリスがパレスチナを撤収すれば、そこに進出できる機会が生じる。しかもシオニスト主流派は社会主義国家の建設をめざしており、そこを足掛りとした中東進出も可能と思われた。そのような政治意図は別として、ソ連大使は、特別総会と秋の定期総会で、大略次のように主張している。「西欧諸国は、どの国もユダヤ民族の基本的権利を守ってやることができなかった。そのユダヤ人達は、パレスチナにユダヤ人国家建設を求めている。その願望を無視し、或いは、その目的の権利を否定するのは、正義にもとる。第二次世界大戦時ユダヤ人が苦しんだことを考えれば、拒否は正当化できない」。

UNSCOP（パレスチナ特別委員会）の二つの提案

特別総会の開催目的は、調査委員会の設置とその任務の付与であった。安保理メンバーとアラブ加盟国は除外され、地域を考慮してスウェーデン、オランダ、チェコ、ユーゴ、イラン、インド、オーストラリア、カナダ、グァテマラ、ペルー、ウルグアイの 11 ヶ国がメンバーに選ばれた。

スウェーデンのサンドストレム代表を委員長とする委員会は、国連パレスチナ特別委員会（UNSCOP）と呼ばれ、次の 3 項目を含む 11 項目を指針として行動することになった。その任務は、パレスチナに関わるすべての問題を対象に調査し、国連総会に勧告することである。

アブダッラー I 世

※委任統治を終了し、可及的速やかに独立を認める。

※新国家の政治体制は、民主主義を基本とする。

※パレスチナの経済的一体性を維持する。

委員会は 1947 年 6 月 16 日から 7 月 24 日まで英委任統治領パレスチナに滞在し、各地を視察すると同時に、ユダヤ機関と英委任統治政府の関係者計 34 名から意見を聴取した（パレスチナ側については、高等委員会がボイコットしたため、意見の聴取ができなかった。但し、トランスヨルダンのアブダッラー王は秘密裏に会った）。

その後委員会はベイルートへ行き、エジプト、イラク、レバノン、サウジ及びイエメンの政府代表と会って、パレスチナ問題に関する意見を聴いた。委員会メンバーの一部はヨーロッパで DP キャンプの人達と会っている。

1947 年 8 月 31 日、国連パレスチナ特別委員会は、ジュネーブで報告書に署名した。しかし、勧告の統一ができず、その報告書は、多数派案（分割を勧告）と少数派案（連邦制を勧告）の二つで構成されていた。少数派案は、インド、イラン、ユーゴが支持、多数派案は、スウェーデンなどの 7 ヶ国。オーストラリアはどの案も支持しなかった。

ドブ・ヨセフ政治局員の回想

当時ユダヤ機関政治局のメンバーであったドブ・ヨセフ（前出）は、1947 年 9 月アメリカへ行った。分割決議が通るよう皆と力を合わせ、各国代表部を説得するのが仕事であった。ところが、搭乗機が着陸すると、一行はそのままスタテン島に隔離された。食事の時は、係りの人がドアを開け、食物をのせたワゴンを押しやり、あわてて閉めるのである。こんな隔離の日が 4 日間も続いた。

ドブ・ヨセフ

なんのことはない。エジプトでコレラが発生し、アメリカの検疫官がパレスチナは同じ地域であると勘違いしていたのである。解放された一行は、国連本部のあるレークサクセスへ急行した。以下ヨセフの回想である。

「かくして私は、人生最大の願いを実現させる仕事にいきなり直面した。それは、日常的な普通の願いではない。我々の霊的存在の根源にある希望である。そのような希望は、先祖からの血脈に流れている。魂が滅ぶことがなければ、希望は生命の一部といってよい…。

政治局員達は大車輪で工作にあたった。国連の各国代表部と接触し、縷々（るる）説明し分割支持を求めるのである。しかし、賛成か反対か或いは棄権にまわるのか、はっきりした態度をつかむことがむずかしかった」。

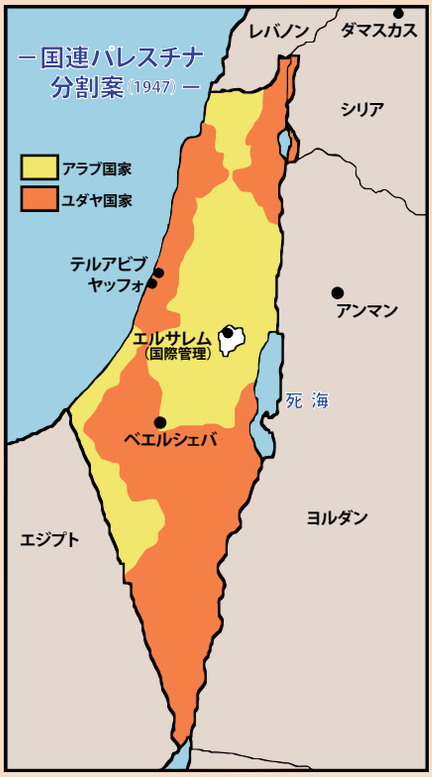
分割案に絞ったAd Hoc Committee(臨時特別委員会)

二つの提案は、臨時編成の特別委員会（Ad Hoc Committee、全加盟国57ヶ国がメンバー）に提出され、二つの分科会（分割案を検討する第一分科会、連邦案を扱う第二分科会）で、詳しい詰めが行われた。そして11月25日にそれぞれの案について投票が行われた結果、特別委員会は、提案を分割案に一本化し、これが総会で採択にかけられることになった。

国連決議

「1947年11月29日。いよいよ決議採択の時が来た。議場は各国代表団や我々のようなオブザーバーで一杯になり、緊張がたかまってきた。ところがである。いよいよ投票開始という段になって、レバノン代表が立上り、緊急動議があると述べ、新しい提案を説明し始めた。それは連邦案の蒸し返しであった。

アラブの政治策略で、我々に有利な投票予想がくつがえされるのではないか、不安がつのってくる。すると、アメリカのハーシエル・V・ジョンソン大使が立上り、『レバノンの動議は、先に委員会に提出された少数派案と同じである。状況に合った妥協のベースにならないとして、委員会が却下したのである。総会は投票に移るべきである』と述べた。



国連パレスチナ分割案

オブザーバー席にいた我々は固唾をのんだ。オスワルド・アランヘ総会議長が、トリグヴェ・リー事務総長の方へ少し体を傾け、二人が小声で協議した。それから姿勢を正すと、『私はアメリカ代表の主張を受入れる』、『直ちに投票を開始する』と宣言した。

決議が行われた時の国連総会

投票はアルファベット順で、指名された各国代表は、イエス、ノーで答えるのである。我々には、離散時代と同じ程の時間が続いているように感じられた。しかし、投票は実質3分で終ったのである。投票が進むと結果がほぼ判ってきた。私は感動のあまり涙声で、隣の席に座る婦人に向かって『やりました、やりました、我々は勝ちました』と叫んだ。私の全く知らない婦人だった。

総会議長が投票結果を読みあげた。賛成33票、反対13票、棄権10票、欠席1（泰（タイ））である。議場がどよめき、拍手が鳴りやまなかった。抱きあって泣いている人達もいる。イギリスの代表達は、表情がこわばり、険しい雰囲気であった。アラブの代表達は怒りで青ざめ、周囲の騒ぎをよそに黙って座っていた。議長がユーモラスな音調で小槌を叩き静粛を求めた。しかし、ざわめきはしばらく続いた。やがて閉会が宣言され、各国代表部はロビーへ流れていった。閑散とした議場。傍聴席は我々ユダヤ人オブザーバー達が残り、運命の瞬間の喜びにひたり続けた。

70代に及ぶホームレス状態と離散に終止符を打つ。その戦いのまさにクライマックスの瞬間に我々は深くかかわった。その意味と喜びと感謝は、言葉では表現できない。もどかしかった。私には祈りしかない。私は詩篇126篇を口ずさんだ。

『主がシオンの捕われ人を連れ帰られると聞いて
私達は夢を見ている人のようになった
その時には、私達の口に笑いが
舌に喜びの歌が満ちるであろう』」

ついに来た大試練の時

分割決議のニュースがパレスチナのユダヤ人社会に届いたのは、時差の関係で深夜になった。エルサレムやテルアビブでは住民達が外に出て喜びを分かち合い、シナゴーグで祈りを捧げた。しかしユダヤ人の間には決議に対する不満もあった。それは、ユダヤ人の6分の1程が住むエルサレムが、国連の信託統治下に入る事であった（1948年春の時点におけるエルサレムの人口構成は、ユダヤ人99,300人、ムスリム33,700人、キリスト教徒31,300人）。

そして、新たな試練を象徴する事件が起きた。11月30日、ナタニヤ発エルサレム行きのユダヤ人バスがロッド付近で襲撃され、4人が殺された。エルサレムではスコーパス山のハダサ病院に向かう救急車が銃撃を受けた。それはアラブ正規軍の侵攻の前触れであった。

【次号へつづく】

ユダヤ・中東研究家　滝川 義人

1937年長崎県生まれ。
早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー（1968～2004）として勤務。
現在、MEMRI（メムリ、中東報道研究機関）日本代表。ユダヤ、中東研究者。
主要著書：『ユダヤ解読のキーワード』（新潮社）、『ユダヤを知る事典』（東京堂出版）など多数。